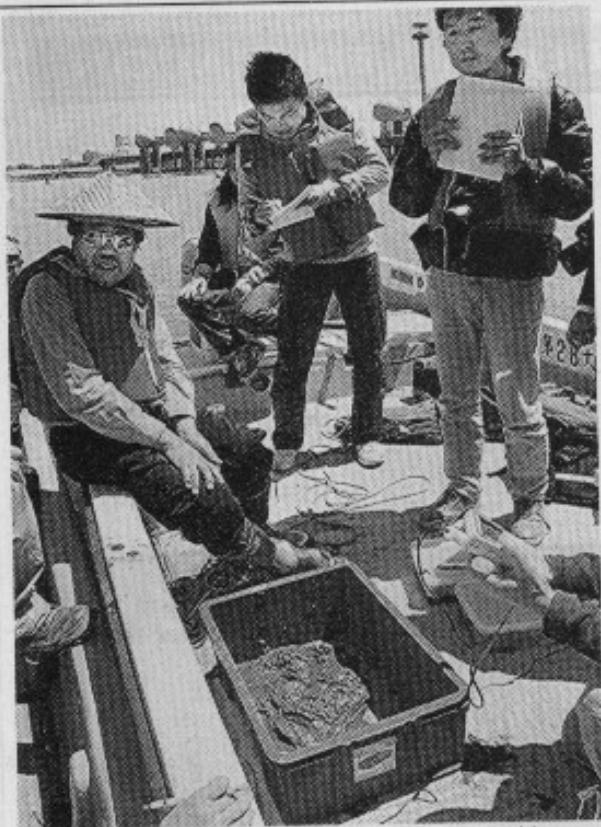


(第3種郵便物認可)



長良川河口堰の上流で採取したヘドロを見る参加者ら=三重県桑名市で

東海二県の環境団体などでつくる「市民による『豊かな海づくり大会』実行委員会」は、二十五日、三重県桑名市の長良川河口堰周辺で「ヘドロを見る会」を開いた。堰の上下流の川底からは真っ黒で

異臭を放つヘドロが採取され、参加者は船上からゲート開放を訴えた。

同実行委は、六月に関市の長良川で開かれた「第二十回全国豊かな海づくり大会」に合わせて「河口堰問題を直視しよう」と結成。大会の一週間前に独自の海づくり大会を開く予定で、イベントとしてヘドロを見る会を企画した。

参加者は船に乗り、長良川の河口堰の下流二カ所、上流一カ所

## 河口堰 酸欠で「死の海」

### 長良川 環境団体がヘドロ調査

長良川の三カ所の泥はいずれも、含有酸素量を示す「酸化還元電位」の数値がマイナスで酸欠状態。真っ黒で粘性の高いヘドロがほとんどだった。一方、揖斐川の川底はすべて砂で酸素が豊富。生きたヤマトシジミも確認された。

岐阜大の柏谷志郎教授（環境生物学）によると、堰上流には川から流れてきた有機物が堆積。堰が海水と淡水を分離したため、堰下流ではゲートを超えた比重の軽い淡水と、重い海水が層を形成。底に新しい酸素が行き渡らず、「酸素が必要な生物が生きられない死の海」になっているとい

う。また、堰で潮の干満がなくなつたために激減したヨシ原も見学。岐阜大の山内克典名誉教授（動物生態学）によると、一九九五年の堰運用から八年で、河口のヨシ原の九割が消え、水の浄化作用が失われたという。今本博

健京大名誉教授（河川工学）は「当時の河川工学が環境への配慮を欠いていたことは明らか。これらの情報を市民や行政が共有し、ゲート開放の必要性を考えるべきだ」と話している。（山本真嗣）

岐阜のタウン情報を  
携帯で「中日新聞・中スポ」

動画や街角ライブカメラ  
も見られます

モード、Yahoo! ケータイ、  
EZウェブのニュース  
メニューからアクセス

QRコード

※バーコード対応の携帯電話で読み取ってください。

岐阜・三重・愛知の最新情報  
正子岡に植山車本知宮分  
岐阜・三重・愛知の最新情報  
正子岡に植山車本知宮分